様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520509
研究課題名（和文）古代日本・朝鮮における中国渡航者の比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of People introduced to China From Japan and Korea in 8thC.～12thC.

研究代表者
石井　正敏（ISHII MASATOSHI）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：10107469

研究成果の概要：
古代、特に８世紀～12 世紀に、日本及び朝鮮から中国に渡航した人々について、比較研究を行った。比較の対象として主に日本・新羅の遣唐使ならびに日本成尋・高麗義天の入宋僧を取り上げ、日本・朝鮮・中国の関連史料を蒐集するとともに、関連する遺跡の現地調査を実施した。これまでも個別の研究は、いわゆる対外関係史の分野で進められていたが、比較の視点からの検討はあまりなされていない。本研究では、これまでの研究史を踏まえ、文献と考古学の知見を総合的に検討することで、新たな成果を得ることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	0	0	0
2010 年度	0	0	0
総　計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：遣唐使　鴻臚館　張宝高　崔致遠　成尋　義天

１．研究開始当初の背景

課題による研究を申請した背景と動機には、大きく二つある。

（１）対外関係史の進展

近年の対外関係史研究の進展には目を瞠るものがあり、まさに社会のグローバル化を反映している。研究業績も汗牛充棟という表現が相応しい状況にある。研究代表者石井正敏と研究分担者濱田耕策は、それぞれ日本史・朝鮮史を専門とするが、それぞれその枠を超えた、東アジアの視点に立って研究を進めてきた。その過程で、研究課題としたテーマについて、根本史料に即した基礎的な研究が必要であることを痛感したことが、申請の

背景にある。

（２）日韓歴史共同研究委員会の発足ー日韓両国研究者交流の基盤整備ー

石井正敏と濱田耕策は、2002 年に発足した「日韓歴史共同研究委員会（第一次）」古代部門委員として、３年間にわたって韓国側委員と日韓の古代史について共同研究を進めた。この間、日韓両国の研究状況の報告や史料・遺跡の調査、博物館訪問などを通じて、多くの研究者との交流を実現し、日韓両国における共同研究の基盤を築いている。そしてその経験を通じて、今回のテーマを課題とした共同研究を行うことで両者の認識が一致した。

２．研究の目的

古代の中国を中心とする東アジア世界における人的交流の諸様相研究の一環として、日本・朝鮮の中国渡航者を取り上げ、比較研究を行うことを通じて、次のような課題を明らかにすることを目的としている。

（１）渡航者の身分・資格・条件、サポートの組織・体制・、国家・社会等の関わり等々、多角的な視点から比較検討して共通点・差異点を見出し、その背後にあるそれぞれの時代の国際認識を明らかにすること。

（２）特に日本・韓国・北朝鮮・中国等における研究成果を取り入れた視野の広い研究を行うことにより、東アジアの政治・文化圏に関する新たなる知見を示すこと。

以上の２点を主たる目的としている。

３．研究の方法

日本史学を専攻する石井正敏と朝鮮史を専攻する濱田耕策とが協力し、これまで蓄積してきたそれぞれの研究を基礎に、文献史料と考古学の最新の成果を取り入れた研究を目指した。ただし研究課題に関わる事項は多岐に亘るため、研究の対象をしぼることとし、日本・新羅の遣唐使、９世紀の日本・新羅・唐三国間に展開された人的ネットワークの中心として活躍した張宝高（張保皐）、そして宋代に渡航した僧侶の代表として日本の成尋と高麗の義天を取り上げ、研究を進めた。その具体的な方法は次の通りである。

（１）文献史料の蒐集整理と分析

史料ならびに研究文献では、まず基礎的な文献目録を作成し、その目録にしたがって日本・中国・韓国・北朝鮮で刊行された史料集や研究書の購入を進めた。特にこれまで日本における研究実績において不十分な高麗時代を中心に、主に韓国で刊行されている墓誌銘などの金石文史料、ならびに目録、辞典などの工具書、そして研究書を購入し、課題研究の基盤整備に努めた。

（２）現地調査

文献史料による研究で重要とみられる地点や地域について、現地調査を実施した。主な地域は次の如くである。

①鴻臚館・博多遺跡群

古代・中世の中国・朝鮮への窓口と言うべき博多湾に面して設置された鴻臚館ならびに博多駅前周辺に広がる博多遺跡群の調査を実施した。日本から中国・朝鮮へ渡航するルートの起点となる鴻臚館については、ここ 20 年来本格的な発掘調査が行われている。現場を訪ね、最新の成果を目の当たりにし、多くの知見を得ることができた。また博多遺跡群の最新の調査により、宋・高麗貿易に従事する宋商人たちが集住する「唐坊」の一がほぼ特定されているが、その情報を蒐集することができた。

②佐賀県唐津市呼子町加部島

入宋僧成尋が宋に渡るため、宋海商の船に乗り込んだ肥前松浦郡壁島（現在の佐賀県唐津市呼子町加部島）の調査を実施した。

加部島全島を詳細に踏査し、成尋の日

記『参天台五臺山記』延久４年３月 15 日条に「壁島西南浦」と記述のある出港地が、加部島の南西部であることを確認することができた。この時期における中国への渡航地が博多周辺に限らず、肥前松浦からさらに五島列島へと広がりをみせていることを確認した。これは次代の日宋貿易の時代における貿易地・渡航地の広がりを示すものとして興味深いものがある。

③韓国釜山市国立海洋大学校張保皐研究所

９世紀の日本･朝鮮（新羅）･中国（唐）三国間貿易の中心人物で、日本人の入唐にも助力した新羅人張宝高（張保皐）について、近年韓国では精力的な研究が行われている。その研究の中心の一つである韓国釜山市にある国立海洋大学校張保皐研究所を訪ね、所長をはじめとする研究者と意見の交換を行い、貴重な出版物を入手することができた。あわせて古代の日本の中国渡航ルートにあたる金海付近の現地調査を実施した。

④広島県福山市鞆の浦

日本人の中国への渡航ルートとしては、王都のある畿内から大宰府への国内ルートの研究も重要な意味を有している。そこで古代の瀬戸内海交通についても検討を進め、特に『万葉集』巻 15 の遣新羅使歌に注目し、ルートの確認を行い、特に遣新羅使が立ち寄ったという、現在の広島県福山市の鞆の浦を訪ね、現地調査を実施した。なお、新羅の遣唐使についても、王都慶州が半島の東海岸に位置することから、西海岸の出発港までのルートの解明を進めた。公使のたどるルートの比較研究のための検討を文献と地図とを用いて進めたが、この点については不十分で、今後の課題としたい。

⑤その他

この他、主として濱田耕策は韓国の遺跡を中心とする調査を実施した。新羅の古都慶州では、王京跡に関する最新の発掘成果を調査･確認し、慶州東国大学校・慶北大学校等において、韓国人研究者との意見交換を行い、韓国における最新の研究情報を得ることができた。

４．研究成果

（１）日本・新羅の遣唐使比較研究

古代の日本と朝鮮における中国渡航者の代表として、まず遣唐使があげられるであろう。今回の研究を通じて日本・新羅の遣唐使の比較研究が可能になったことが、まず特筆される。日本の遣唐使については、日本の古代国家の形成と展開に大きな影響を与えた所から、長い研究史と膨大な研究の蓄積がある。石井正敏もかねて遣唐使に関心を持ち、「遣唐使編年史料（稿）」（『遣唐使研究と史料』　1987 年）･「外交関係―遣唐使を中心に―」（『古代を考える　唐と日本』1992 年）をはじめとする史料集・論文ならびに著書『東アジア世界と古代の日本』（2003 年）等を通じて、日本の遣唐使の研究を進めてきた。今回の研究期間中、濱田耕策は新羅の遣唐使について詳細に史料を蒐集し、分析した。新羅の遣唐使に関する本格的な研究と評することができる。これにより、日本・新羅の遣唐使の比較研究が可能となり、新しい東アジアの遣唐使像を提供する基礎が形成された。今後の課題としては、日本・新羅以外の遣唐使、例えば北の渤海や南の南詔などとの比較をさらに進める必要がある。

なお、濱田耕策の新羅の入唐留学生崔致遠の研究により、中国に渡航した留学生や留学僧のあり方についての日本・朝鮮（新羅）比較研究が可能になったことも特筆しておき

たい。

（２）入宋僧成尋と義天

石井正敏はかねて入宋僧成尋の研究を進めてきた。成尋の入宋（1072 年）とちょうど同じ頃高麗では義天（大覚国師）が入宋（1085 年）している。いずれもそれぞれの国内で支配層の帰依を受ける高名な僧で、成尋も義天も入宋に際しては周囲に反対されるという共通性を有している。こうした両者を比較することで、国内に有為な人材を失うことを恐れる人々の背後にある宗教観、時代認識などを明らかにすることができた。この研究を基礎に、今後さらに考察を進め、入宋僧を支援する国家や社会に存在する諸問題を明らかすることを目指したい。

（３）渡航ルートの問題

本研究の一つの柱として、渡航ルートの問題を取り上げた。日本・新羅いずれも中国上陸地は山東半島（登州）もしくは浙江省（明州・杭州）と共通しており、例えば成尋の『参天台五臺山記』には宋国内巡礼の許可を得るため杭州に滞在中の成尋のもとを、日本語を話せる高麗の船員が訪ねてきたという記述がある。そこでそれに至る日本・新羅の出発地に焦点を当てて研究を進めた。日本側の重要な遺構である鴻臚館や博多津をはじめ、成尋が利用した肥前松浦郡壁島などを現地調査することにより、日本人が中国渡航に利用した場所の時代的な変遷や周辺地域の開発の状況を明らかにすることができたことも大きな成果と考える。なお、鴻臚館研究の一環として、日本の鴻臚館に相当する日本人用の客館が置かれていた釜山に出張し、現地調査を実施した。

中国側の明州（寧波）や杭州の調査が実施できなかったことは残念であるが、近年精力的に上記地域の現地調査を実施して成果をあげている榎本渉氏を招いて研究会を実施した（中央大学人文科学研究所科学研究所「情報の歴史学」チームと共催）。同氏による「寧波城・杭州城の踏査記録」により、杭州について多くの知見を得ることが出来た。

（４）日本・新羅・唐三国間の人的ネットワークの中心にいた張宝高という人物にスポットをあてて、日韓両国研究者の意見交換の機会をもてたことも重要な成果で、今後の共同研究の基礎を形成することが出来た。

以上が今回の研究により得られた主な成果となるが、このような石井・濱田の共同研究のことが韓国に知られ、韓国ＫＢＳの番組「歴史追跡：新羅海賊　なぜ対馬島を侵攻したか」にそろって出演（2008 年 12 月 13 日放映）したことも付記しておきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）

①石井正敏「『異国牒状記』の基礎的研究」（『紀要（中央大学文学部）』史学第 54 号）Ｐ１～34　2009 年　査読無

②濱田耕策「日本現代語訳『新羅聖徳大王神鐘之銘』」（『史淵』第 146 輯）Ｐ81～100　2009 年　査読無

③濱田耕策「新羅誓幢和上碑の二字－薛仲業の来日をめぐって－」（『石門李基東教授定年紀念論叢』學研出版社）　2009 年　査読無

④石井正敏「『金液還丹百問訣』にみえる渤海商人李光玄について－日本渡航問題を中心に－」（鈴木靖民編『古代日本の異文化交流』勉誠出版）P598～609　2008 年　査読無

⑤濱田耕策「新羅の遣唐使と崔致遠」（『朝鮮学報』第 206 輯）Ｐ１～20　2008 年　査読有

⑥濱田耕策「新羅の遣唐使－上代末期と中代

の派遣回数ー」（『史淵』第 145 輯） P 127～153　2008 年　査読無

⑦石井正敏「『日本書紀』金春秋来日記事について」（佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社）P29～42 2007 年　査読無

⑧石井正敏「藤原定家書写『長秋記』紙背文書「高麗渤海関係某書状」について」（『人文研紀要（中央大学人文科学研究所）』第 61 号） P １～33　2007 年　査読無

⑨石井正敏「『源氏物語』にみえる「高麗人（こまうど）」と渤海」（『高句麗研究』第 26 輯）P 169～182　2007 年　査読無　（韓国語訳 P 183～197）

⑩石井正敏「源隆国宛成尋書状について」（『中央史学』第 30 号） P 44～62　2007 年　査読無

⑪石井正敏「『成尋阿闍梨母集』にみえる成尋ならびに従僧の書状について」（『紀要（中央大学文学部）』史学第 52 号） P １～39　2007 年　査読無

⑫濱田耕策「新羅の文人官僚崔致遠のアイデンティティ」（九州大学 21 世紀ＣＯＥプログラム『東アジアと日本：交流と変容』） P 11～17　2007 年　査読無

⑬濱田耕策「『東夷』諸民族の王権形成―夫余族系諸族と郡県統治との関係性の諸相」（田中良之・川本芳昭編『東アジア古代国家論』） P 141～155　2006 年　査読無

⑭濱田耕策「高句麗長寿王という時代―父王広開土王の治績を継いで」（『朝鮮学報』199・200 合輯） P 231～263　2006 年　査読有

〔学会発表〕（計７件）

①石井正敏「『報恩院文書』所収高麗牒状について」（中央大学人文科学研究所「情報の歴史学」チーム公開研究会）2008 年 12 月 6 日

②濱田耕策「東アジア海域と鞠智城」（「日韓シンポジウムⅡ・古代山城・鞠智城の歴史的価値」熊本県菊地市文化会館）2008 年 11 月 8 日

③濱田耕策「朝鮮古代の国家形成」（平成 20 年度九州大学大学院人文科学研究院公開講座）2008 年 9 月 13 日

④石井正敏「『異国牒状記』と貞治６年の高麗使」（中央大学人文科学研究所「情報の歴史学」チーム公開研究会）2008 年 3 月 21 日

⑤濱田耕策「新羅の遣唐使と崔致遠」（朝鮮学会公開講演　天理大学）2007 年 10 月６日

⑥石井正敏「古代の対外交易と鴻臚館」（鴻臚館発掘 20 周年記念シンポジウム『鴻臚館の輝跡』　福岡市中央市民センター）2007 年９月 15 日

⑦石井正敏「藤原定家書写『長秋記』紙背文書「高麗渤海関係某書状」について」（中央大学人文科学研究所「情報の歴史学」チーム公開研究会）2007 年 3 月 17 日

〔図書〕（計１件）

①石井正敏・田中健夫『対外関係史辞典』（吉川弘文館）2009 年　Ｐ１～Ｐ902

〔その他〕（計１件）

①書評：濱田耕策「武田幸男著『広開土王碑との対話』（『朝鮮学報』第 209 輯）　Ｐ83～91　2008 年

６．研究組織

(1)研究代表者

石井　正敏（ISHII MASATOSHI）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：10107469

(2)研究分担者

濱田　耕策（HAMADA KOUSAKU）
九州大学・人文科学研究科（研究院）・
教授
研究者番号：40137881

(3)連携研究者
該当無し

(4)研究協力者
①河辺　隆宏（KABE　TAKAHIRO）
中央大学大学院文学研究科・博士後期課程
②近藤　剛（KONDO　TSUYOSHI）
中央大学大学院文学研究科・博士後期課程